

# 「社会貢献」の企業理念で、 知的障害者の雇用へ

—佐藤薬品工業株式会社—

職場  
レポート

EMPLOYEE REPORT

(文) 清原れい子 (写真) 小山博孝



佐藤薬品工業株式会社

〒634-8567 奈良県橿原市観音寺町9-2  
TEL 0744-28-0021 FAX 0744-28-0030  
URL <http://www.sato-yakuhin.co.jp>

聴覚障害者から  
雇用を始める

奈良県の橿原神宮駅から車で一分ほど、周辺に古寺や古墳が広がる歴史の町に「佐藤薬品工業株式会社」がある。一九五一年、佐藤又一会長が御所市で会社を設立して、家庭への置き薬から事業をスタート。七七年に現在地へ移転し、二〇〇一年に佐藤進社長が後を継いだ。

「私どもの企業目的は、第一に『医薬品の製造を通じて、国民の保健衛生に貢献する』です。二番目には、財団法人モラロジー研究所のニューモラルを社員教育の一環として勉強していますので、利益を追求するだけではなく、道経一体思想で経営をして、一隅を照らす努力をしていきたいと思っています。社員の幸せのための会社であるということも、社是の目標のひとつです。弱い人には優しく手を差し伸べる。障害者の法定雇用率は最低限クリアしなければなりません」

常務の上村家榮さんは、総務部長などを経て二〇〇八年六月に現職に就いた。

「医薬品業界も規制緩和の中、工場を持たない製薬会社が多く認可されていますが、当社は大手医薬品メ



佐藤進社長

ーカーの受託加工をメインに数多くの品目を製造するほか、健康食品も製造しています。八五年ごろには人員整理という苦い経験がありました。その後は比較的安定していますね」

受託しているのは約六〇社。倉庫には私たちが日ごろ飲んだり、目にしたりする大手医薬品メーカーの品々が出荷を待つ。

ここ数年は社員数の変動はほとんどなく、現在四一七名（常用雇用労働者数）。



上村家榮常務

肢体不自由者四名、聴覚障害者二名、知的障害者二名、精神障害者一名の人たちが働いている。佐藤薬品工業で「障害者」を意識して新卒を採用したのは、聴覚障害者が最初だった。上村さんは当初から採用にかかわってきた。

「景気が回復した八八年のことでした。ろう学校の生徒さんを採用してくれませんかと言われたのがスタートです。その際、社長から『一人だと話す人もいないので、二人採用したらどうか』と言われましたが、同時に二人採用できなかった。少し後でもう一人を採用しました。障害者雇用に関しては、その人のために仕事をつくるのではなく、その人に与えられる仕事があれば採用するという考えで取り組んできましたが、その考えは今も変わりません」

聴覚障害者を雇用して、最初は戸惑うこともあったとか。

「作業中にベルトの上で眠るんです。なぜかと思ったら、彼氏ができて夜、当時ですからファクスでやりとりをしていたのです。お母さんに、金曜か土曜の晩に限定してくださいとお願ひしたら、よくなりました。家庭のご理解もないと障害者の方の雇用はうまくいかないと思います。その彼女は、すでに結婚して退職しました」

社内では、聴覚障害者が働き始めたことをきっかけに手話勉強会が始まった。



ビニールなど梱包物の圧縮作業をする鉢上雅也さん（31歳）



坂本昌史工務部次長（写真左）の指示を受けて作業する鉢上さん

「当時の配属先の主任の女性が先頭を切り、聴覚障害者を講師に休憩時間などに手話の勉強会を行いました。これが基盤となつて、聴覚障害者が勤務しているグループ内では簡単な手話でやりとりをしているようです。ときどきトラブルがありますが、ほとんどが思い違いによるものです。そのときは二人以上で、本人と周りにいた全員から状況を傾聴し、再度本人に説明するようにしています」

また、現在では勤務のかたわら、檀原市の手話ボランティアとして登録し、市の行事や会社の講演会でも手話通訳として貢献している。

## 初めて知的障害者を雇用

知的障害者の雇用は、〇五年一二月のトライアル雇用から始まった。

「包装、検査など薬の製造に従事できる聴覚障害や、車いす以外の下肢障害の方を採用してきましたが、障害があっても仕事をする上では健常者と同じにできる人だけを求めているのでは、企業の社会貢献という経営理念から外れるのではないかと考えて、知的障害の人たちの採用を始めました」

第一号の鉢上雅也さんは、メンテナンスや管理を行う工務部で迎えた。工場内から出てくるビニール、大きな梱包物などかさの多いものを機械で圧縮している。その作業では誰にも負けない。

「彼に任せておいたら、どんどん仕事をしてくれそうです」と工務部次長の坂本昌史さん。そのほかに、工場内の草刈りや清掃作業を行っている。「夏場は暑いので、昼に着替えて、洗濯機で自分のTシャツや、ほかの人の作業着や手袋も一緒に洗っています。危険な場所での作業をしないように気をつけています」

総務部次長の青山寿行さんが、鉢上さんの入社当時を振り返っ



07年4月から資材課で働く黒木智さん（24歳）と話す奈良障害者職業センターの吉川文字子ジョブコーチ（写真左）

た。「障害者職業センターのジョブコーチの方、地域のハローワークの方と三位一体の中で採用に踏み切って、サポートしていただきましたが、どの程度の知的障害者であるのか、まったく想像がつかず、どのように接したらいいか不安でした。実際には担当者を一人つけて、作業の中で一つずつ覚えてもらおうように指導しました。最初はいろいろなトラブルはあったと思いますが、今は落ち着いて仕事をしています」

ジョブコーチ支援は奈良障害者職業センターで、吉川文字子さんの前任者が担当



青山寿行総務部次長

「前任者から聞いた話ですと、自閉的傾向のある方ですが、見た目では障害があるかどうかわかりませんので、まず障害の特性をお伝えしました。また理解力はあるのですが、コミュニケーションが取りづらいところを直接の上司に説明させていただきました。ご家庭の事情もあり、清潔面の確立ができていませんでしたので、会社で手厚くご協力いただきました」

職場で着替えを済ませ、洗濯ができるようにと洗濯機を購入。採用を決めた上村常務も心にかけてきた。

「自分のお子さんがそうだったらどうするかと考えて接してくださいとお願いをしていますが、現場の担当者が親心で接してくれたので、現在の彼があると思います。返事がなかなか出ないのでノートで伝言のやりとりをしています。人を見て、この人の言うことは聞かなくても

いいとか判断します。私のことは怖いようですが、指導している担当者が退職したときにどうするか今後の課題ですね」

吉川さんは、社の近くにきたときは立ち寄っている。

「彼は、甘いジュースやお菓子も好きで糖尿病を薬で抑えています。担当の方がジュースは一日一度だけというルール作りをして、紅茶や麦茶を作って冷やしてくださいっています。心にかけてくださっていますね」

その後、〇七年四月にアスペルガー症候群の男性を採用した。

「当初、製造現場で機械操作の補助的



食堂の清掃を丁寧に清水香さん（22歳）



清水さんとともに食堂を担当する高見芳江さん



お茶や箸をかたづけ、器を洗う城彰子さん

な仕事をしていましたが、てんかんがありましたので、現在は資材課で倉庫内の荷物の受け入れ業務をしています。仕事に関しては完璧ですね。薬の調整がむずかしいらしく、症状が出たときはご家族と連絡を取って家に送っていきます」



フォークリフトの免許を取得し、倉庫で製品の出入庫作業を行う辰本昌之さん（41歳）。上下肢に障害がある

## 健全者と同一職場で働く

一度に三百数十名が入れるという大きな食堂の床はピカピカだ。床の清掃は、昼食のお茶や箸の準備や片付けなどを担当する清水香さんの仕事のひとつ。トライアル雇用を経て、〇九年四月に入社した。「仕事は慣れましたか」「はい」、「掃除が上手ですね」「研修で練習しました」、「周りの人は優しい？」「はい」と笑顔に。「働き続けられそうですか」「はい」としっかりと答えが返ってきた。

「障害者の集団面接会で出会い、八時間働くことができ、社会保険にも入れるところを希望して当社にきました。本人も納得の上でトライアル雇用に入りましたが、大人数の中で働いたことがないと最初は人に酔っていましたね。表情はまだ硬いのですが、仕事はきっちりしています」と上村常務。

「知的障害者のみなさんには最終的にはさまざまな仕事を覚えてもらおうと思えますが、まずあいさつができるよう指導しています。休憩時間などには周囲からできるだけ多く声をかけるように心がけてもらっています」と青山次長。

高見芳江さんも笑顔。専業主婦から勤めて三年目。「みなさん、優しいです。仕事は忙しいですが、やりがいがあります」大手薬品メーカーの製品がたくさん並

ぶ倉庫でフォークリフトを動かし、荷受けや出荷などを行う辰本昌之さんは転職して八年になる。

「最初は厳しいかと思ったのですが、今は当たり前前の仕事になりました。菓関係の梱包したものはかなり重量があります。製造番号順に間違わないように、製品名もよく似たものがありますから間違わないように出荷しています。ダブルチェックをしていますから、間違っても出荷することはないですね。これからも働き続けるつもりです」

「彼は左腕が不自由ですが、採用面接のときから、健全者とともに仕事をしたいと意欲的でしたので、フォークリフトの免許取得に挑戦させました。本人の意思を尊重することが、よい結果をもたらしていると思います」と上村常務。

社員旅行は二年に一回。最近では北海道、沖縄と行って、今年は初心に返って、伊勢へ。費用は全額会社持ちでバス一台を連ねる。

「行きたい人は全員参加です。全員で宴会ができるホテルを探るのが大変で、記念写真もバス単位で撮っています。香港旅行のときは、手話ができる係長が聴覚障害者を同じバスに乗せて、一緒に観光案内もしていました」

軟式野球部は、天皇賜杯・全日本軟式野球大会で〇七年、〇八年と連続優勝した。ナイター設備のグラウンドがある。

「会長は野球が好きで、創業のとき、企業を一つにしようとしてチームプレーの野球を始めました」

健全者も知的障害者も、同一賃金でスタートする。

「障害者だからと賃金を下げて雇うことはせず、同じスタートでいいというのが社長の方針です。昇給は、本人の努力次第です。また、できるだけ健全者と同じ職場で雇用しています。自立して生きるために働く場を提供して、共生社会を実現するという企業としての考えがあります」

## 障害者にもできる 仕事があれば

障害者雇用への青山次長の思い。

「知的障害者の雇用はご家庭も協力していただかないとうまくいかないと思います。うちの子は仕事に対する理解力が高いから佐藤薬品工業にお世話になっていっていると思っております。ご家庭の中でもっと実態を理解していただけないと本人の自立もむずかしいですね」

最初からかわってきた上村常務のメッセージ。

「会社に合う障害者の方だけを雇っているのでは、本当の障害者の雇用ではないと考えて、聴覚の方を雇いました。次

## WORKSHOP REPORT

に知的の方の採用に踏み切りました。ほかの障害者に比べて大変は大変ですが、与えられた仕事を真面目にコツコツと繰り返し返してきますので、一つひとつ積み重ねて、いろいろな仕事ができるようになると思います」

「『自分のお子さんだと思って』とお願いをしていますが、同賃金ということもあり、現場の人たちが理解していないとむずかしいところがありますね。障害者を雇うために新しい仕事を作ることはいらないと思いますが、これからも障害者にできる仕事があれば、雇用をしていきますし、雇ったら最後まで面倒をみていきたいと考えています」

企業とジョブコーチ。にこやかな雰囲気でもやり取りが続く。吉川さんはハローワークの障害者相談窓口にいたときから上村常務とは面識があった。

「当時は総務部長として、求人や手続きにいられていました。私がジョブコーチとなり訪問をしておりますが、上層部の方の思いが社員にまで周知されていません。何回か寄せていただくうちに一般社員の方が同じ目線で受け入れてくださっていることがわかってきました」

これからの抱負を含めて、佐藤社長にうかがった。

「社風としては家族的な雰囲気な会社だと思っています。幹部の人たちをよそからまだ招へいしていますので、内部の若手



工場内の清掃を担当する堀井りつ子さん



社員の制服等のクリーニングをする下田峰子さん

登用を考えて、ここ三年ぐらいに四〇歳ぐらいで部長の辞令を出せるようにしたいですね。企業としては、永続発展していきたいと思っています」

冬の奈良はとても風が冷たかったが、家族的な雰囲気の中で働く障害者たちの笑顔が明るかった。